

# 体育の男女共習について

3年4組6番 岡本奈々

## 1. はじめに

私は「体育の男女共習、別習」について探究に取り組んだ。私は、このグローバル探究を通じて男女差別の問題について知りその現状を調べた。

そしてその調べから、日本における女性差別の現状について、ジェンダー・バイアスが大きく関わっていると分かった。ジェンダー・バイアスとは、文化的性差による差別や偏見を表す言葉である。

家庭において、男は仕事、女は家庭といった思考が強く、共働き夫婦であっても妻は家事、育児、介護にかかる時間が1日で4時間以上の時間があるのに対して、夫はわずか30分しか家事や育児などに関わっていないところが沙汰のようだ

実際、私自身もお母さんが家事をして、お父さんが仕事に行くことが普通だったのでなんの違和感もなく生活していた。これらの調べを通じ、私は、男女差別が生まれる原因として、文化的差異がかかわっていることから、私たちの男女が分けられるという昔からの習慣が影響しているのではないかと思った。そこで私は、身近な中で男女が分けられる場面として1番印象にあったのが体育の授業だと考えた。

女性は身体的特性が男性よりも不利な環境にあるため、オリンピックなどで競技によって男女別に競技をすることは妥当だと思う。しかし、男女別に競技することで、記録を比較されその差から女性が男性よりも劣っていると考える人がいる。このような比較意識の派生から女性が社会的に差別されているのでは無いかと考えた。

私は、中学生から体育、保健体育の授業を男女が分けられた状態で行っていた。最初はなぜ分けられるのだろうと不思議に思ったが、男女には体力や運動能力の差があるので分けることが普通なのかなと考え、特に思い詰めはしなかった。

私の中学校の体育の授業では男女別に先生が決めたスポーツを指示に従いながら行っていたが、ドッジボールの授業の時だけは男女混合で行っていた。そのドッジボールのルールは男子ばかりが有利にならないため、男子用、女子用とボールを分けて行われていた。このルールのおかげで、女子も男子も楽しくドッジボールを行っていた。だが、このドッジボールを見ていて男子はほとんどの人がドッジボールに参加しボールを投げあっていたが、女子の中にはドッジボールにあまり参加してない女子が多くいた事に気づいた。そのほとんどの子が「男子のボールが怖いから、上手く投げれないから、他の子がやってくれるから」という理由で参加しておらず、その中の人から男女で分けて欲しいという意見も上がっていた。女子の中にはドッジボールに積極的に参加する子もいればそうでない子もいることから、女子の中でも体力や運動能力に差があったり、男女混合での授業を好む人と好まない人がいることが分かった。

男女間だけでなく、女子の中、男子の中でも個人によって能力が違っていることになる。

これまでの体育では男女の身体能力の差で大きく括って活動してきたが、それでは個人の運動能力を伸ばしにくいし、体育を楽しめない人がいる。

では、全員が平等にスポーツを楽しむことができ、かつ効率よく運動能力をあげられるような体育にしていけないのかと考え、「男女の共習、別習」についての探究に取り組んだ。

## 2. 序論

まず、私は現状「なぜ体育では男女別習なのか」という問いをたて、中学校からの体育は別修でないといけない理由があるのか調べた。

日本では1999年に男女共同参画社会基本法が公布された。これにより学校教育に関しても家庭科が共習となり、そして体育でもダンス・武道が男女共習になるとともに、男女平等のカリキュラムになった。それにより、男女が互いに尊重し合い、平等・同等の関係性や、それぞれ個人の能力の拡大が可能になると考えられていた。

しかし、男女共同参画社会基本法が公布される以前、女子はダンス、男子は武道と分けられていた。この習慣から、長年男女共習をポジティブに捉えて来なかった事もあって、すぐに男女共習授業が実践されるようになったわけではなかった。

東京女子大学でのスポーツとジェンダーに関する調査による関東地方の高等学校250校に体育の共修についてのアンケートを取ったところ、38%の学校が共修にしていないという結果になった。なかなか簡単には共習に移行できていないのが現状である。

私は、私以外の周りの人意見をきくため、校内でグローバル探究の授業において個人で調べた発表を行う第一回目の探究週間の際に私のプレゼンを聞いてくれた生徒を対象に、

「男女は共習別習どちらにすべきか」というアンケートをとった。その結果、この間に対する回答の中で1番多かったのが、「種目によって共習、別習に分けるべき」という意見だった。またその回答に付け加えて、男女共習のデメリットとして、「身体的、体力的に差がある。怪我が心配です。お互いに気を使ってしまう。」などの意見も多く上がった。

このアンケートの結果より、私と同じように男女共修に賛成だと考える人が多くいることが分かった。そして、デメリットもおおくあがったことから男女共修にするためには多くの課題があることも分かった。

男女共同参画社会とは男女共同参画社会基本法2条に、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益をこうじゅすることができ、かつ、共に責任を担うべき社会」と定義されている。また、「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別に関わりなく、その個性と能力を十分に発揮する」ことが主旨であるとも記載されている

つまり、性別にとらわれることなく、個人の意志で好きなスポーツを実践することができると考えられる。(男女共修体育の実践が今後推進して行かなければ男女共同参画社会の基本理念に反していることになる。)

## 3. 本論

男女共同参画社会基本法での基本理念で記されているように男女共修を今後推進していかねばならないことが分かった。つまり男女共修に移行できていない現状は男女共同参画社会の基本理念に反していることになっている。

そして男女共修に移行するべきだと積極的に考える人が多くいることから、今後共習に移行する活動を行って行けば、今よりもより良い体育授業になるのではないかと思った。

そのために先程述べたデメリットの面を改善し全員が平等に授業を行うためにできることを考えるべきだと考えた。

この結果より私は、種目によって男女共修、別修を分けるべきであると思った。共習授業のねらいを達成するために、体力・能力差を考慮したルール作り、グループ編成の工夫が必要になる。

そこで、どうすればよりよく共修授業が行えるようになるのかを考えようと思う。

体育において男女でどういう点で分けられているのか。先程の共修でのデメリットであげたように身体能力、体力の差によって分けられることが多いことがおおい。例えば、持久走の時には男子には長い距離を設定し、女子には短い距離を設定していたりするなど。しかし、初めに述べたように女子の中でも個人個人で運動能力の差がある。今まで女子は女子、男子は男子の平均の数字を目標にそれぞれ取り組んできた持久走だが、男子の中には女子の平均よりも遅く、逆に女子の中には男子の平均よりも速く走れる子も多く存在する。持久走において男子には頑張るように、女子には無理をしないでというような違いが認められた。男子は速くあるべきであるといういつの間にか出来ているイメージが定着してしまっていて、このような励まし方になってしまっているのだと考えた。

このような問題を解決するため、目標を自分自身のタイムと競うなど、自分の能力に合わせた目標設定をするべきだと考えた。自分で目標設定をすることで、個人の能力をより上げやすくなるのではないかと思う。

タイムが早い人は男子の方が女子よりも多いだろう、だが、個人で結果を見てみれば男女それぞれ様々なものになるだろう。

ダンスや運動神経の差があまり関係のない競技では男女が共に楽しめるようにするため、男女混合でグループに分ければ良いと思う。

種目によっては先生の指導が男女どちらか一方にかたよってしまい、相互関係が成り立たなくなるという問題も予想されたが、メリットとして、「他者を認め、理解する能力がつく。自立心が生まれる。競技心が芽生える。」などがあがった。共習授業にすることによって、男女間の相互関係が深まり、生徒同士が真剣に取り組める環境がつかれるのではないかと考えた。

もちろん男女で体力差はあるので、持久走で男女それぞれ平均に差は出るものだと思う。実際、各体力要素の平均値や最高記録では男女差がある。しかし、男女別に平均を出すのではなくて、全員の記録を一人一人見てみれば、男女関係なく個人個人で力の幅が出る。

ダンスや体づくりの運動では、その活動自体が創造的であるため、一人一人が提案しやすく、意見を出し合って意見をまとめていくグループ学習の進め方ができるので、男女の違いをお互いの良さとして引き出すことができると思った。

これからはチーム内の対等な関係を作れる環境や約束事を設定して、男女皆との関係をより良いものにしていく。そうすることで、誰もが誰に対しても、意見やアドバイスが出来る平等な関係になっていく、そこから対話的な活動が多くなり、技能の向上もお互いを生かす作戦の創造も実現するのではないかと考えた。

#### 4. 結論

今までそれぞれ男子は男子、女子は女子の平均記録を越すことを目標にして授業を行ってきた。だが、男女で分けてしまうのではなく、体格・体力差、技能差、経験差などを一人一人の個性として捉えて、個人個人で目標を立てることで、もっとスポーツを楽しめるのではないかと考えた。個人個人で目標をたてることで、持久走の力は、男女でそれぞれの平均を

出せば、差は確かにある。しかし平均せずに全員の力を一人一人見ると、持久力には大きな幅があり、グラデーションのように個々それぞれが力を持っている。男子の中には女子の平均よりも遅く、走ることが不得意な者もいれば、女子にだって男子の平均よりも速く走ることに挑戦したいと頑張っている者もいるだろう。教師の声かけによっては、もっと伸ばした女子生徒の意欲に刺激を与えることができなかつたり、とても苦手な男子に自分は女子に負けてしまうなんてだめなのだという感覚を与えてしまっている。

目標によって達成しやすい授業形態が共習授業であるのか、別習授業であるのかを見極め、柔軟に授業形態を使い分けていくことが重要であると考えた。

体力・能力差の問題を解決するために、グループワークを導入するとよいのではないかと考えた。グループ間の能力が均等になるようにすることで、競争心が芽生えたり、お互いに体力や能力を高めて行けるのではないかとおもう。また、グループでのワークなので、教えあったりすることができ、色んなグループとのコミュニケーションもとれる。これにより、他者を知ることができたり受け入れ合うことができるので、人間関係もよりよくなっていくだろうと考えた。

## 5. おわりに

男女共習が定着していくにつれ、私たちのこれからのスポーツとの関わり方が変わっていくのではないかとおもう。教習を行うことで性別、障がいのあるなし、技能の差などを元々ある境界として考えるのではなくて、その境界は無いものとして当たり前になっている状況で学習ができるようになるのではないのかなと思う。

これまで女子は体力や運動神経が男子より劣っているからという理由で職業や日常の中でも分けられていることが多くあった。しょうがないと思いつけていた事でも実は私たちにも可能性があるのではないかと思えるようになった。

## 6. 参考文献・出典

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編

片田孫朝日(2008)体育指導における性別カテゴリーの使用—高校体育の持久走授業の場面記述から—。スポーツとジェンダー研究、6:31-41.

宮本乙女(2018)体育授業におけるジェンダーの生成。飯田貴子ほか編著、よくわかるスポーツとジェンダー。ミネルヴァ書房:京都、pp. 48-49.

宮本乙女(1997)〔実践事例〕ダンスとジェンダー、学校体育、50(2):31-33.

宮本乙女(2002)ダンス学習とジェンダー 報告 2—ダンス学習による学習者と指導者の意識の変容—。お茶の水女子大学附属中学校紀要、32:103-118.

中村恭子(2009)中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査に基づいて—。順天堂スポーツ健康科学研究、1(1):27-39.

笹川スポーツ財団(2015)子どものスポーツライフデータ 4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書。笹川スポーツ財団:東京.

梅澤秋久(2016)体育における「学び合い」の理論と実践。大修館書店:東京

出典：男女共同参画局「日本企業におけるジェンダーバイアスの現状と施策」

出典：厚生労働省「依然として難しい女性の就業継続」

梅澤秋久(2016)体育における「学び合い」の理論と実践。大修館書店:東京.

